

聖書：ローマ 8：17

説教題：神の相続人

日時：2015年11月15日（朝拝）

今回は14節で「神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。」と語られました。そして御霊がどのように私たちを助けてくださるかが語られました。15節で私たちは御霊によって「アバ、父」と呼ぶとありました。また16節で神の子どもであることは御霊が私たちの霊とともにあかししてくださいました。そして今日の17節には、神の子どもたちについてのもう一つの新しいことが語られています。それは子であるなら相続人でもあるということです。前回の15～16節は現在の歩みに関わることと言えますが、今日の17節は神の子どもたちの将来に関わることと言えます。この素晴らしい将来を見つめることによって、私たちの今日の歩みは導かれて行くべきであるということです。

さて私たちはどんな相続人なのでしょう。まず言われていることは「神の相続人」ということです。もし大金持ちの家に生れたら、その子どもはきっと多くを相続する人になるでしょう。私たちはその人を羨ましく思うかもしれませんが、しかし実はその必要はありません。なぜなら私たちは「神の」相続人だからです。神は一体どれほどの富を持っておられる方でしょうか。神はすべてを持っておられる方。世界とその中に満ちるものを造られたのは神です。神は無からあらゆるものを造り出せる無尽蔵の富を持つ方です。その方から私たちは相続するのです。1コリント2章9節：「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」 1ペテロ1章4節：「また、朽ちることも汚れることも、消えていくこともない資産を受け継ぐようにしてくださいました。これはあなたがたのために、天にたくわえられているのです。」

しかしこの「神の相続人」という言葉にはもう一つの解釈の可能性があります。それは「神ご自身を相続する」という理解です。これは一体どういうことかと思うかもしれませんが、これは旧約聖書から示されて来たことです。たとえばレビ族は約束の地の中に割り当て地を持たないが、それは主が彼らの相続地だからと言われました。申命記18章2節：「彼らは、その兄弟たちの部族の中で相続地を持ってはならない。主が約束されたとおりに、主ご自身が、彼らの相続地である。」 詩篇73篇25～26節：「天では、あなたのほかに、だれを持つことができましょう。地上では、あなたのほかに私はだれをも望みません。この身とこの心とは尽き果てましょう。しかし神はとこしえに私の心の岩、私の分の土地です。」 哀歌3章22～24節：「私たちが滅びうせなかったのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。それは朝ごとに新しい。『あなたの真実力は強い。主こそ、私の受ける分です。』と私のたましいは言う。」

私たちはどっちを取れば良いのでしょうか。結論から言えば、どちらかだけを取る必要はないと思います。結局は両方を意味することになるからです。確かに私たちは聖書で言われているように、やがて天の資産を受け継ぎます。しかしだからと言ってそれらの「もの」にだけ目の色を変えて飛び付き、

神をそっちのけにすることはありません。神を喜ぶことと別に、それらの「もの」だけ喜ぶことはないのです。そういう意味で神ご自身を喜び楽しむことが私たちの幸いの中心です。しかしだからと言って私たちは神を相続するのであって、「もの」は相続しないと言うのも行き過ぎでしょう。私たちは神を味わい、神ご自身を相続しますが、その目に見える現われとしての実際の資産にもあずかるのです。ですから私たちは相続財産を手にすることを楽しみにして良いのですし、それとセットで神を私の神、私たちの神として十分に持つ喜びに生きるのです。

二つ目に「キリストとの共同相続人」と言われています。これは私たちが「神の相続人」となるのは、具体的にどのようにしてなのか、その道筋を示しているものです。本来、神の子どもはイエス・キリストお一人であり、この方のみが神の相続人です。しかしキリストは私たちをご自分と結びつけてくださり、私たちを神の子どもの特権すべてに共同であずからせてくださる。神の家の王子は、他の人と共同相続したら自分の取り分が少なくなるなどといったケチなことは言いません。むしろご自分が受ける豊かな祝福をみな私たちと分かち合ってください。ヨハネ 17 章 4～5 節：「あなたがわたしに行なわせるためにお与えになったわざを、わたしは成し遂げて、地上であなたの栄光を現わしました。今は、父よ。みそばで、わたしを栄光で輝かせてください。世界が存在する前に、ごいっしょにいて持っていましたあの栄光でかがやかせてください。」 同 24 節：「父よ。お願いします。あなたがわたしに下さったもの（下さった人々）をわたしのいる所にわたしといっしょにおらせてください。あなたがわたしを世の始まる前から愛しておられたためにわたしにくださったわたしの栄光を、彼らが見るようになるためです。」

さてここまで神の子どもたちの素晴らしい将来について見て来ましたが、この祝福にあずかるにはある条件があるということも語られています。それは「私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら」ということです。条件と言うと少し厳しく聞こえますが、ここには素晴らしい慰めが語られていると言えます。原文で先に書かれているのは「もしキリストと苦難をともにしているなら」という言葉です。このローマ書 8 章では御霊にあるクリスチャンの絶対的救いの確かさと祝福が力強く語られていますが、現実には人間の目に良いと思われることばかりがあるわけではありません。実際には多くの苦難に囲まれています。なぜキリストを信じて救いを頂いた者になお苦難が伴うのでしょうか。それはまずこの世はキリストを十字架に付けた世だからです。ヨハネの福音書 15 章 20 節：「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。」 この世はイエス様を捨て、イエス様を十字架につけて殺した世です。ですからそのイエス様に私は従いますという態度を明確にしたら、この世から同じような扱いを受けるとするのは当然の帰結です。「あなたもまさかあの仲間ではないでしょうね」と世から軽蔑の目で見られる扱いを受けます。クリスチャンであるということで嫌がらせをされたり、仲間外れにされたり、冷たくされて不利益を被ることがあります。またキリストに従う奉仕のための苦しみもあります。ある意味で自分のことだけを考えて生きることができたら楽だと思えます。しかし私たちは主が私たちに仕えてくださったように私たちも他者に仕えて歩むようにと導かれます。主がそのために大きな犠牲を払われたように、主にならう私たちの歩

みにも犠牲と労苦が要求されます。簡単にコストを払わないで人を愛することはできません。福音を伝えることにおいてもそうです。みことばを伝えることがただ楽しくて人間的に必ず成功し、皆から感謝されることだったらどんなに楽でしょうか。しかし実際には様々な反対がありますし、人が変えられていくプロセスには多くの労苦が伴います。私たちそれぞれの救いのためにも、陰では多くの人々の祈りと労苦と忍耐があったでしょう。また愛の奉仕もそうです。主に導かれて周りの人々の必要のために仕えます。しかしそこにもうめきがあります。それは私たちの地上のからだの弱さとも関係しています。もし私たちのからだが強くて、疲れることを知らず、何でもできる能力があったらどんなに良いでしょう。しかし実際には様々な弱さの中にあります。もっと主のために働きたいのに、健康が妨げとなることもあります。その他あらゆることがそうです。ローマ 14 章 7 節にありますように、私たちは「だれひとりとして、自分のために生きている者はなく、また自分のために死ぬ者もありません。」 食べるにも、飲むにも、何をすることも、ただ神の栄光を現すためにしようと思えます。そういう私たちは難しい問題のただ中にあっても、ただ自分のためにその解決を願うと言うより、そのことを通しても主の栄光が現わされることを第一に願います。病気や災いや経済的貧しさといった問題と格闘していても、それらも主の栄光のために用いられることを願います。私たちはそのように主のために生きようとする歩みの中で様々なうめきを経験しています。

しかしパウロはこれらの苦難について何と言っているのでしょうか。彼は、この苦難は「栄光とともに受ける」ことにつながるものだと言っています。彼は苦しみもあるけれど栄光もあるという励まし方をしていません。そうではなく、この苦難は栄光へと至る通路である。栄光に至るためにはどうしても通らなければならない前段階である。イエス様もこの順番でした。「苦難とそれに続く栄光」という順序でした。イエス様と結ばれた者も同じなのです。これは私たちの今の苦しみをどんなに違った光の下で見させてくれるものでしょう。ともすると私たちは目の前の苦難のために落胆してしまいます。そして苦しみとは関係なく歩んでいるような人を見て羨ましく思います。自分だけがみじめなように思えて来ます。しかしそうではない。もしキリストとともに苦難の道を歩んでいるなら、それは素晴らしいことを示しています！すなわちそれは将来の栄光へ至るためのコースを歩んでいる！ということです。実はこれこそ真の祝福の道であり、神の相続人に指定された道であった！ですから私たちは今の苦しみを何ら恥じることはないのです。むしろこれを自分の大きな喜びとすることができるのです。

最後になぜ私たちは栄光の前に苦難を通る必要があるのか、2 つの御言葉を参照して終わりたいと思います。一つ目は 1 ペテロ 1 章 6~7 節：「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。いまは、しばらくの間、さまざまな試練の中で、悲しまなければならないのですが、あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちていく金よりも尊く、イエス・キリストの現われのときに賞賛と栄光と栄誉になることがわかります。」 ここで私たちの苦難が、金を精錬する火にたとえられています。つまり苦難は私たちを磨くためのものです。天国とは相容れない不純物を焼き尽くすためのものです。私たちをより純粋にするためのものです。イザヤ書 48 章 10 節：「見よ。わたしはあなたを練ったが、銀の場合とは違う。わたしは悩みの炉であなたを試みた。」 詩篇 119 篇 71 節：「苦しみに会っ

たことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました。」

もう一つはヘブル書 12 章 5～7 節：『わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。』訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるのでしょうか。」すなわち神は私たちをご自身の子として訓練してくださっているということです。今の苦しい状況は決して不運なくじを引いたということではないのです。これは父なる神の愛のもとで導かれている訓練の時なのです。このことを通して神は、私を栄光にふさわしく整えてくださろうとしているのです。

私たちは今苦しみにあるのでしょうか。悩みの中にあるのでしょうか。主のために生きている者としてうめいているのでしょうか。そうであるなら、私たちはその苦しみを低く見積もってはなりません。この苦しみは栄光へとつながっているものです。この後に栄光が続いています。神はご自身の相続人にふさわしい者へと、私たちをこの祝福のコースにおいて導いてくださっています。このことを知るなら私たちのすべきことは怒ったり、イライラしたり、心配したり、意気消沈することではなく、一切を御手に治めて最善を導いてくださる天の父に今一度全幅の信頼を置くことではないでしょうか。「どうか今の苦しみや戦いを通して私の信仰を磨いてくださり、あなたの相続者にふさわしい者へと聖め導いて下さい」と祈るべきではないでしょうか。神の子どもたちには素晴らしい将来があります。その栄光に至らせるために、神はご自身の子どもたち一人一人に、キリストが歩まれた苦難の道とともに歩むようにと導かれるのです。「もし子どもであるなら、相続人でもあります。私たちがキリストと、栄光をともに受けるために苦難をともにしているなら、私たちは神の相続人であり、キリストとの共同相続人です。」